

ついでには兩氏の海容を仰ぎたい。なお在印度の井上氏の御健勝を祈念しつつ。(A5版、本文四四九頁、索引一八頁、図版三三葉、定価一四〇〇円、山川出版社刊)

—— 田村 円澄 ——

山口弥一郎著

開拓と地名

—— 地名と家名の

基礎的研究 ——

地名の研究は柳田國男氏により先鞭をうけられたことはいうまでもないが、それ以後日本ではあまり發展してきていない。その間にあつて、近年古い文化の中心である京都に中野文彦氏を中心として関西の歴史家、郷土史家、國語研究家等が相集つて日本地名学研究所が設立され、さらにここ發行の「地名学選書」中の一冊としてまず本書の出版をみたことは、この方面の研究の將來の發展を豫期せしめるものとして慶賀にたえない。

本書の著者は既に「東北の焼畑慣行」、「東

北地方の經濟地理研究」等を發表して、東北地方農村生活研究所を主宰し、三十年このかた東北地方の農民の經濟生活を研究して今日に到つている。本書はB六版の選書の一冊という制約もあつて、必らずしも固くるしい純學術書の体裁をなさないが、内容が盛りたくさんであり、しかも著者の過去三十年間の研究がエキスされているものとして、地名研究の概観を知るためにはやはり、柳田氏の書物とともに無視出来ないように思う。

二五五頁にわたる内容をほぼ二分し、前編では材料を全国一般に求め、後編では磐城、陸中、羽前、羽後等、東北の特殊地域を取扱つている。前編はさらにこれを、第一「地名と開拓前の自然景観」、第二「地名より窺た開墾集落の發達」以下「最小集落の生活と單位地名」、「北上山地の屋号と集落」、「漁村の發達と納屋地名」、「焼畑と地名」、「鑿と古い交通路」、「鬼越、二渡の地名」の八つを取録する。この後二者は共にそれぞれ交通路の仲間集落ないしは荷渡集落の存在を意味するという。前編を通じての特徴は著者が地理学者であるだけに地名研究における地域的復原を重要視することである。しかも第一の論文に

ついでにいえば、これを湿地開墾地名(ヤチ、クテ、ムダ、フケ、タニ、サク)、陽地、陰地(ヒナタ、ヒカゲ、オンチ、アテラ)、泥炭地(サルケ)、瀉開墾(カタ、スカ)、荒地、崖地、惡地(カガ、カスカ、カッカ、カノガ、コガ、コウガ、アクツ、アクト、ゴウラ)、原始林、草原等の地名(ガツギ、アシ、カンワ、ハノキ)等自然的景観を主にして分類、且つその地名の場所を歴史的地理的に説明する。これは従来の地名研究が蒐集した地名カードの摘出に終つているのからみると一歩進み、時には新編会津風土記や同武蔵風土記等の記載を注意する等著者の学問的態度がうかがわれる。これを第二の開墾集落の項についてみても、従来知られる別府や興野、新田等の地名のほか、東北に多い派等を説明する。ハダラはハダツであり、津軽では最初木を伐り、根を掘り起す開墾の意味にも用いたことを古文書等から示し、現在では村落名として立派に生長しているという。またこの項では分村地名に注意し、分村のすべてが必ずしも開墾によるものではないが、漸次開墾されて集落が増加し、本村と区分する必要からおこつたものとし、岡清水に対する浜清水畝

方に対する谷方等対蹠的な地名を求める。また吉岡禍福の際に、助合つたりする単位をあらわすサメといった言葉が部落名から地名を表現するものになつてゐる例をあげ、ほかに、

輪や垣内、間切、作、株等々いづれも部落組織の最小単位の地名からおこつたとみる。また社会経済史的観点を見のがさない氏は、隔絶された北上山地のある村については地名と名宇、屋号が夫々同一にして、しかも同じ名宇の家が少いのに対して、他の地理的条件のめぐまれた村にあつては反対であることに注意した。前者の場合山村僻地にあり、他地方との交渉が少く地名が村名となり、明治のはじめ名宇命名の許された時に、そのまま継承されたのだとし、後者では開拓定居が古く、名宇の場合一種平均十二戸八分で、前者の二戸六分と異なること、一方屋号は二戸四分となり、名宇は後に有力者の名宇に統制されたこと、その他本家、分家の関係が後者に目立つこと等をあげる。これらの一々を量及び質の両様からインテンシブに調査し、山村開拓や集落設定の時期を推定せんとするのである。また納屋地名においても従来知られた九十九里浜だけでなく、東北地方の事例があげられて

いるのが便宜であり、焼畑地名でもまた東北地方の例がより詳細である。

要するに氏の場合もまた地名の分析を通じて地域の特色や開拓の歴史を求めんとするものであり、ことに時代の古い文書記録の残存度が僅少な東北地方の研究に地名を利用したことは正しい方法であると考えられる。後編の諸論放またいずれも、地名を地形関係、開墾関係、交通関係、信仰、慣行関係、アイヌ語関係等と分類して一々の例をあげたものである。

本書を読みながら感じる唯一の欠陥は地理学、民俗学、社会経済史の三者をマスターする著者が、いつたいどの学問に主体をおいて地名を研究しているのかといった方法的吟味が欠けていることである。序文に「東北の経済地理を学んでいて、結果は東北の生活を解くために、自然の制約を究めると共に、この生活を維持、或は発展させてきた社会経済史や民俗の資料を、新たな角度で蒐集してみようとしたのであつた。私はこの一部を地名に負おうとした。」とあるが、本文の内容ではやや資料の列挙に終つた感がないでもない。ことに地理学として地名研究上最も必要な

は局部地域の考証、もつと地籍図等を利用した、小字名の研究である。地形図上の地名を

取り上げ、定量的にその傾向を分析するやり方は従来のやり方であるが、本書の前編では、対象を日本全国に求めたため、このやり方は従来なやり方ではない。著者の博識から多くの方すらなされてゐない。著者の博識から多くの各地の地名がただアットランダムに列挙され、立論の根拠としてゐるように思われる。

例えば著者のごとくクテの地名を必ずず湿地を表す言葉だけと解するならば、中仙道の宿駅の大久手(漱)のごときは、むしろ高燥地の宿駅として著名なのはいつたいどういふことなのだろうか。こんな場合高燥地を流れる溪谷もあるし、そんな箇所を呼んだものであるのかどうか読者にはもつと局部の微地形と地名との関係が知りたい。第二に評者の何時も感じることは、地名や民俗学の研究者は、日本の郷土学者に終つてゐる感じが強いことである。ドイツやイギリスその他の地名研究がどのような体系を示しているのか、それに対する日本の研究は方法的にも実際の研究法の上にも、いかような特異性を有しているのかをもつと教えてほしいものだ。シュニエーターのドイツ誌にはこの地名研究が古文

獸利用以上に血となり肉となつて活かされて
いるように考へる。それはともかく本書のは
じめに、少しでよいから、著者の既往卅年の
研究成果を組立てるべき著者独自の研究の方
法のすべてはしつかつたのは、あながち評者一
人の勝手な注文でもないように思う。(B6
二六六頁、定価三〇〇円、日本地名学研究所
発行)

藤岡謙二郎

Li Chi : The Beginnings of Chinese Civilization.

1957. University of Washington
Press, Seattle, U.S.A.

(李濟著「中国文明的開始」)

著者の李濟氏については、今更紹介するま
でもない程に、中国の考古学界の最高の研究
家の一人である。一九二六年に山西省夏県西
陰村で、著者が行つた彩陶遺蹟の発掘は、中
国人による中国の最初の科学的な発掘であつ
た。その後、中央研究院歴史語言研究所考

古組のリーダーとして、安陽の殷虚、山東省
城子崖などの発掘を主宰すると共に、これら
の発掘によつて得た資料を駆使して多様な研
究活動を行つてゐる。特に殷虚の遺物を中心
とした研究が数多く発表されているのは、中
央研究院が、実際に発掘を行つた期間が、そ
のまま殷虚の発掘の期間であつたことを考え
るならば当然である。青銅器(容器・利器と
も)、陶器、石器、人骨の形態的な研究など、
その範囲は非常に広い。勿論こゝいつた各々
の研究に対して、見解を異にする学者も多い
であらう。然し、こと殷虚の研究に関する限
りは、実際の発掘に従事したこと、或いは資
料を直接手にして研究している点は、何んとい
つても著者の長所である。而かも、こゝい
つた各種の資料を綜合した文化全体の上から
遺物を考へるといふ態度は、考古学者のなか
では数少い一人である。今一つ著者の研究の
特色をなしているのは、遺物を数量的に取り
あつかうという方法である。発掘した遺物の
報告に、そのスケールや重量などを記載する

ことは、普通行われることであるが、さて遺
物を集めて研究するとなると、形態的な

器形或いは文様などの——研究に終始して、

数字が無視され勝ちである。この点李濟氏の
研究は、独特な方法をもつてゐる。例えば、
青銅器の研究では、器の外形的なスケールとと
もに、その容量が常に注意され、容量の比率
によつて各種の銅器の一組としての組合せを
考え、更に、それから銅器の用途を考えよう
とする。陶器の研究でも、その外形的な相互
関係とともに、成分を化学的に分析して製陶
の技術を考へる。こゝいつた方法は、中国を
始め、少くとも中国考古学に関する限りは、
余り行われなかつた。こゝいう点では、新し
い研究方法を拓いた人と言つてもよいであら
う。

こゝの「中国文明的開始」は、以上のよ
うに、中国考古学の最も優れた研究者の一人
である李濟氏が、一九五四年ロッキンフェラー
財団の招きで、アメリカとメキシコを訪問し
た際行つた三つの講演をまとめ、補足して出
版したものである。従つて次の三つの部分か
ら成り立つてゐる。

I. Digging Up China's Past, II. Origin
and Early Development, III. The Bronze
Age of China.

第一の Digging Up China's Past は、人